

由起しげ子の小説にみる1950年代の女中像 — 「女中ッ子」を中心に —

The Image of domestic help during the 1950s as seen in Shigeiko
Yuki's novel *Jyochukko*

清 水 美知子*
Michiko SHIMIZU

Abstract

This paper examines the image of domestic help in an urban middle class household as seen in *Jochukko* (1954), a short novel by Shigeiko Yuki, the first postwar winner of the Akutagawa Prize. The novel's protagonist Hatsu is a young woman with meager opportunities who came to Tokyo from an isolated village in Yamagata. The story unfolds along the axis of the relationship between Hatsu, employed as domestic help in a household of hardheaded people with little interest in others, and Katsumi, the nine-year-old second son shunned by the family.

Conspicuous in this work is the attitude of the employers, who demand a master-servant relationship with domestic help under their command. This is apparent not just among the adults but among the children as well. The mid-1950s in Japan was a time in which improving the working conditions of domestic help attracted the attention of society amid a shortage of domestic help. The ardent desire of domestic help was for their occupation to be recognized as a profession. Seen from a different angle one could say that under the generally accepted view of their status at the time, domestic help were treated as being a step lower in social standing.

キーワード：女中, 由起しげ子, 小説, 「女中ッ子」

I はじめに

2015 (平成27) 年7月16日, 第153回芥川賞の選考結果が発表された。受賞作は羽田圭介『スクラップ・アンド・ビルド』と又吉直樹『火花』であった。特に後者は, マスメディアで名前を知られるお笑い芸人のデビュー作ということもあって, 大きな話題を呼んだものであった。受賞作『火花』の単行本も増刷に次ぐ増刷を重ね, 9月には累計発行部数が229万部を突破した^{注1}。この

* 関西国際大学人間科学部

発行部数は、芥川賞受賞作品として歴代1位の記録である。

正式には「芥川龍之介賞」という芥川賞は、純文学系の無名もしくは新進作家の創作に与えられる文学賞である。年に2回、文芸雑誌に発表された作品の中から候補作が選出され、選考委員会で受賞が決まる。芥川賞が創設されたのは1935（昭和10）年。文藝春秋社（当時）の社主である菊池寛の発案により、菊地の友人で早世した作家・芥川龍之介の業績を記念して作られた。第1回から第153回までの受賞者はあわせて160人（受賞辞退を含む）、うち女性は44人である。

作家としてのスタートの賞である芥川賞は、新人の登竜門としての性格が強い。そのため、メディアが取り上げやすく、作品の中身よりも作家のプロフィールに関心が集まる。たとえば、第34回（1955年下半期）に『太陽の季節』で受賞した石原慎太郎は、当時23歳の現役大学生であった。恋愛を主軸とした当時の世相や主軸とした日常生活を描いた作品はベストセラーとなった。作中の登場人物のような無軌道な若者を指す“太陽族”や石原のヘアスタイルをまねた“慎太郎カット”といった言葉も生まれ、社会現象を巻き起こした。芥川賞は、“時代を映し出す鏡”としての役割も担っている。

80年以上の歴史を持つ芥川賞だが、第二次世界大戦末期の1945（昭和20）年には中断を余儀なくされた。復活したのは1948（昭和23）年。その戦後初の芥川賞を受賞したのが、本稿でとりあげる由起しげ子である。もっとも、テレビもなかった時代、芥川賞がこんなにちのように騒がれることはなかったらしい^{注2}。彼女は後日、受賞の知らせが届いた時の様子を次のように語っている。

わたくしは賞をとったことは知らないんですよ。そうしたらね、子供が「お母ちゃま、『本の話』がナンとかいうんで、芥川賞とか書いてある」っていうんです。「そんなの、だれかカツイでるのよ」ナンて、電報も見ずにね。そしたらその次の日の新聞に、芥川賞のことが小さく載ってね。それでもまだわからなかったんです。そしたら人がやって来たんです。わたくしは表の井戸端のギョコンギョコンやるところでお米を磨いでいたんです。本にするとかいう話で見えました。それでやっとね、それじゃほんとうに貰えたんだナと、そのとき思ったんです。ですけど、いまみたいね、ちっとも大騒ぎじゃないんですからね¹⁾。

由起しげ子は今日、ほとんど取り上げられることのない作家である。小説の単行本はすべて絶版となっており、新刊本を入手することはできない。作家論や作品論など、由起しげ子自身に関する資料もきわめて乏しい^{注3}のが現状である。

筆者が由起しげ子の小説に着目する理由は三つある。第一に、女性を主人公とし、大正から昭和にかけての中流家庭を舞台とする作品を数多く書いているからである。第二に、作家デビューの前に専業主婦として20年以上の生活歴をもつ、異色の作家だからである。そして第三に、〈女中〉を主人公とした作品を発表し、それが映画化・ドラマ化されるなど、彼女の代表作のひとつとして位置づけられているからである。

筆者はこの数年、女中が登場する小説を通して、日本の家庭や家族、そして社会について考える研究をおこなっている。本稿では、由起しげ子の作品を資料にして、1950年代における女中像について考察したい。

Ⅱ 由起しげ子の人生と小説

1. 実母の死と継母体験

由起しげ子の小説をとりあげる前に、まず、彼女の経歴について述べておこう。由起しげ子は1900（明治33）年12月、大阪府浜寺で父新飼爲義、母とみの次女として生まれた。本名志げ。彼女は4人きょうだいの3番目で、兄、姉、異母妹がいる。実家は女中を何人も置くような裕福な家庭だった。実母は由起が10歳のときに病死し、12歳で継母を迎えた。思春期の多感な年頃にあった由起は、新しい母に馴染むことができず、時間があれば近くの海に出て過ごしたという。継母に対する心情は、小説『指環の話』（1951年）の中で次のように描かれている。「継母の感情の表現は手軽でしばしば露骨であったので姉妹はそれを見て動揺した。それは二人の眼には許すべからざる野卑として映らずにはいられなかったのである。父に対する態度ばかりではない。朝夕の挨拶の仕方、食膳の作法はもとより、家の中での歩き方、笑い方、物の言い方、女中を呼んでものを云いつけるとき、出入りの商品のあしらい方、客に対する應對する仕方に至るまで、何處かに全く異質のものがひそんでいるように思えてならなかったのである²⁾（傍点引用者）。

母を亡くし、継母を迎えたこと。この少女時代の体験がモチーフとなって、由起の多くの小説が生まれている。

2. 音楽への思いと挫折

幼い頃から音楽好きだった由起は、教会で受けた音楽の指導に触発され、作曲家を志すようになった。しかし、家族は彼女が音楽を勉強することに対し、理解を示さなかった。大阪府立堺高等女学校を卒業後、私立プール女学校英語科へ編入し、1918（大正7）年、プール女学校卒業を目前に知り合った作曲家の山田耕筰に入門。卒業するや家族の反対を押し切って、神戸女学院音楽部に入学した。「これで大っぴらに音楽の勉強が出来るようになったわけだが、家ではあくまでもしぶしぶの態度から一歩も出なかった。思い切って、東京へ出してくれなかったのも、ある点ではまずいことが多かった。本当の先生が他にあって、時々家から証明書をもらって寄宿舎から出てゆくということがよくない上に、山田先生の艶名が天下にとどろいたので、心証が悪かった³⁾」と、由起は当時を振り返っている。

1921（大正10）年、20歳の時に神戸女学院音楽部を中退。その後東京に出て、引き続き山田耕筰に作曲を師事した。山田は由起に対し、自由作曲をやめて和声や対位法を勉強するよう厳しく指導したが、この指導法は形式や規則に縛られるのが苦手な彼女の資質にあわなかった。由起は「この躰でペシャペシャになり、あらゆるタブーにひっかかり手も足も出なく⁴⁾」なり、「胸の中に発散しきれないこんとんとした音楽の幼虫のうごめきを抱きながら、壁の中で悶絶しそうな状態⁵⁾」に陥ってしまう。結局、腰椎カリエスを患って3年間の絶対安静を言い渡され、入院したのを機に音楽の勉強から離れた。療養時代について由起は、次のように回想する。

神戸のサニテリウムに入ったり生家の別の家で女中と二人で暮らしたりしたが、病人らしかったのははじめのうちだけで、あとは公認のブラブラした静養期間だったらしい。女中と二人でいた家は、父が三百坪ほど買ってあった天王寺近くの地所に六畳四畳半の休息所を建てて畑作りの時に食事場所としてあったもので、夜は父が泊りに来てくれた。ある時、私が天井

を睨んで寝ていると、庭先から杖をついた知らない女の人が入ってきて、カリエスという病気は不治の病で三年か長くても七年で死ぬ。自分のカリエスだから、もう覚悟はしている。あたなはまだ年が若いのに可哀想やな、と云って帰っていった⁶⁾ (傍点引用者)。

一度は死を覚悟した由起だったが、自然治癒で健康は回復した。別の病院で診断してもらったところ、結局はカリエスではなかったことも判明した。勉学は二転三転と思うように進まず、ついには病気で作曲家志望を断念する。彼女の思春期・青年期は、思いばかりが先行する空回りの時代だったといえよう^{注4}。

3. 主婦として暮らした20年

1925 (大正14) 年、由起しげ子は25歳で、東京遊学中に知り合った伊原宇三郎と結婚した。伊原は当時31歳。東京美術学校を首席で卒業し、卒業制作が帝展に入選するなど、新進気鋭の画家であった。結婚後まもなく、夫が農商務省の海外実業練習生に合格、画業のため単身パリに向けて出発したことから、1926 (大正15) 年6月、由起も渡仏。その後3年間を夫とともにフランスで暮らすことになる。

フランス在住時代の由起は、パリ音楽院出身のマルグリット・ロンについてピアノを学んだほか、画家であった夫との関係から絵画をはじめヨーロッパの芸術に広く親しんでいる。1928 (昭和3) 年11月に長男を出産。子育て中心の生活となり、経済的な問題も重なって翌29 (昭和4) 年7月に帰国する。帰国後は東京に居を定めた。

帰国後の由起は、夫の意向に従って、一家の主婦として暮らさざるをえなくなる。帰国した年の1929 (昭和4) 年と翌30 (昭和5) 年、伊原は帝展で連続「特選」を受賞、帝国美術学校西洋画教授に就任した。由起には高名な画伯の妻という地位が付与された。また、次男 (1930年)、三男 (1937年)、長女 (1939年) と次々と子どもが誕生し、彼女は4人の子どもの母としての生活に追われることになった。見かけは、やさしい夫とかわいい子どもに囲まれた幸せな専業主婦。しかし、夫との関係は、性格上のすれ違いが大きかったらしい。由起の伊原に対する不信任は募る一方で、両者の亀裂は第二次世界大戦末期に決定的なものとなった。なお、フランスでの新婚時代から別居を決意するまでの約20年間の夫婦関係については、のちに長編小説『やさしい良人』 (1963年) に描かれることになる。

4. 生活の糧のために書く

1945 (昭和20) 年12月、45歳の由起は幼い子どもを二人連れて夫の家を出た。別居したことにより、彼女は暮らしを立てていく必要に迫られる。何とかしなければと思っているうち、知人の神近市子らの勧めで『グリム童話』や『アラビアン・ナイト』の翻訳に着手し、さらに童話の創作を試みる。1947 (昭和22) 年から翌48 (昭和23) 年にかけて、生活のために短篇童話を二十篇ほど書いた^{注5}。

くわえて、戦災で無一文になり、夫と死別した病身の姉の面倒もみなければならなくなった。困り果てていた時、手を差し伸べてくれたのが雑誌『婦人公論』の編集長 (当時) の八木岡英治である。八木岡は由起の家に米二升を届け、この米がある間に小説を書くように勧めたという。姉の療養費の工面に頭を悩ませていた彼女は、原稿料を期待して小説の執筆に取り組み始めた。

「どうしたら小説が書けるのかわからないと云うと、綴り方のつもりでやっごらんさいと云うことだったから、父の死を作文した。そのすぐあとで、本の話を書いて、八木岡さんにおあずけして姉の看病に出かけた⁷⁾」。

最初に書き上げた小説は、父の死をテーマにした「告別」だった。ところが、活字になった最初の小説は、二作目の「本の話」のほうだった。由起には「本の話」を発表することにためらいがあったが、掲載するのが純文学の雑誌で多くの人の目に触れることはないと聞き、思いきって掲せることにした。「由起しげ子」というペンネームを用いたのもこの時からである。ちなみに「由起」は姉幸子の「ゆき」の音からとったものである。そして、この小説家としてのデビュー作が、小谷剛「確証」とともに、1948（昭和23）年上半期から復活した第21回芥川賞に選ばれたのである。

後年、芥川賞受賞者の座談会に出席した由起しげ子は、「小説家として立とうということはなかったんですか」という記者の質問に対して、次のように答えている。

そんな、小説家になろうなんて夢にも考えていませんでした。わたくしはあまり小説書くのは好きじゃなかったんです。それでわたくしはね、病気の姉のところへ毎月お金を送らなきゃならないでしょう。ですからね、原稿料をくれたもんですから、とても喜んでやってね。それだけのことなんです。ですからわたくしが小説でも書く人間のように思われて、次々と注文をもってこられるのが不思議でしたよ⁸⁾（傍点引用者）。

5. 芥川賞受賞作「本の話」

「私の義兄、白石淳之介はその年の2月1日、静かな晩、神戸市外のK病院で58歳の生涯を閉じた。咽頭結核であった⁹⁾」という書き出しで始まる「本の話」は、由起しげ子の実体験をもとにして作られた作品である。すなわち、「私」は由起自身を、「白石淳之介」は姉幸子の夫である馬淵得三郎をモデルとしている。結核が不治の病と言われていた時代、その宣告は今のがんよりはるかに死に近いことを意味した。もともと病人は姉の方で、「私」は姉を看護していた義兄が重体に陥っているとは考えも及ばなかった。極度に物資の欠乏した敗戦後の世相を背景に、療養生活を続ける姉のために持てる物を次々売り払い、ついには義兄の形見とも言える600冊の専門書にまで手を付けざるをえなくなる。「私」は、金策に迫られながらも、蔵書が四散せぬよう義兄と交流のあった大学教授にまとめて安く譲りたいという気持ちを抱く。

食べることにのみ明け暮れる戦後の混乱期、「本の話」は一服の清涼剤ともいべき清新な風を吹き送った。しかし、芥川賞受賞時の選評を読むと、必ずしも好意的に迎えられていなかったことがわかる。「精神的な或る高さとか確かさを持って、それにふさわしい表現を見せている（傍点引用者）」（川端康成評）という高い評価の一方で、『『私』という主人公のやさしい気もちも、（ところどころ、気どった書き方で、述べられてあるのは、ちょっとは、おもしろいが、いやみでもあり）、『ひとりよがり』のところが（傍点引用者）」（宇野浩二評）、「由起しげ子の取り澄ましたような気品は、信用していない。且つ、この婦人が、高名な画伯の夫人だと聞いて、よけい、賞をやりたくなくなった（傍点引用者）」（船橋聖一評）というような酷評も受けている。これに対し、受賞後記において由起は次のようにやり返して一矢を報いた。

従来「審査員」といふものはセザンヌを終生落選させたという光栄ある歴史をもっているものであるから、「本の話」に間違っ^て授賞したなどといふことは取るにも足らぬことであらうが、折角権威ありと云はれる芥川賞のためにも、今後はもうすこし確信のある審査をし、賞をほしがったり頼みこんだりしたわけでもないむこの人を無用に過ったり辱めたりしない方がよからう、と思ふがどうであらうか¹⁰⁾。

芥川賞の当選者が審査員に真っ向から反駁するなど、異例の出来事である。とはいうものの、「精神的な或る高さや確かさ」「ひとりよがり」「取り澄ましたような気品」といった評は、いみじくも由起しげ子の小説の特質を言い得ている。彼女が「高名な画伯の夫人」としての生活を20年以上送ってきたのは紛れもない事実であるし、専業主婦として身についた生活感覚や中流上層の市民意識は、夫と別居したからといって急に変わるものではない。復活した芥川賞に戦後文学の新風を期待していた審査員からみると、受賞作は「教養と人柄との持ち味で出来た作品」(瀧井孝作評)だが良識的すぎて物足りない、と受けとめられたのであろう^{注6)}。

6. 職業作家としての活動

図らずも芥川賞作家という肩書きを得た由起は、それまで全く考えていなかった職業作家の道を歩み始める。受賞後の第一作として1949(昭和24)年9月に「警視総監の笑ひ」を発表したのはじめ、求めに応じて次々と作品を発表していく。

「警視総監の笑ひ」は、監禁同然の生活を送っている姪(姉が先夫のもとに残してきた娘)を救出するプロセスを描いたもので、由起の実体験をベースにしている。このほか、先述の父の死をテーマとした「告別」(1951)、中年女性が弁護士に離婚の相談に行く「厄介な女」(1950年)、姉を看取った体験を扱った「指環の話」(1957年)など、自己の体験や周辺に取材した短篇を多く書いた。親しい人物をめぐる何かひとつの出来事、あるいは何かひとつの小事物を焦点にして、その周辺に過去、現在の生活のエピソードをくりひろげるのが、由起しげ子の小説の基本スタイルである。

しかし、自己の体験を扱い、作者と等身大の主人公が描かれていても、主人公の心情が掘り下げられることはほとんどない。その点において、由起の作品はいわゆる「私小説」とは一線を画している。自分もしくは周辺の人々の生き方や生き様を活写し、個々の登場人物を借りて強烈に「人間性」を追究するのが、由起しげ子の小説の特徴である。のちに、北上川のダム開発や三井三池炭坑をはじめとする数多くのルポルタージュを手がけるようになるのも、自然な成り行きであろう。

1954(昭和29)年、「由起しげ子」の名を広く知らしめることになる作品が発表された。山形から女中になるために上京してきた少女と、家族から愛されない少年との触れあいを描いた短篇「女中ッ子」である。この小説は、翌1955(昭和30)年には映画化され、由起の代表作のひとつとなった。この頃から由起は創作の幅を広げ、純文学作品のみならず半通俗的な小説(中間小説)も手がけるようになり、映画化された作品も少なくない^{注7)}。

1963(昭和38)年には、4年にわたって雑誌『文學界』に分載していた8作品を、『やさしい良人』(文藝春秋新社)として公刊した。この作品は、大正後期のパリの新婚時代から終戦間際に別居を決意するまで約20年間の夫婦関係を描いたものである^{注8)}。ストーリーや登場人物のモデルか

らして、由起しげ子の半生の集大成と位置づけられる。

由起しげ子は1969（昭和44）年12月、69歳で亡くなった。夫とは四半世紀近く別居していたものの、正式に離婚届を提出していなかったため^{注9}、葬儀は別れた夫、伊原宇三郎によって執り行われた。ちなみに、夫と正式に離婚しなかった理由については、彼女は書き残していない。

職業作家として活動した20年余りの間に、由起は120篇以上の作品を発表した。それらに一貫しているのは、偽りのない生き方を求める精神である。由起の描くヒロインは概して、純粋さのあまり、現実を眺める眼が一面的で、ときには独善的ですからある^{注10}。しかし、批判されようが彼女たちは堂々と自己を主張し、懊悩したり煩悶したりすることはない。

由起しげ子自身も同様である。女学生時代、家族の反対に遭いながらも音楽の勉強を続けるために転編入を繰り返したこと。敗戦直後の混乱期に、社会的に成功した画家の妻の座を捨てて家を出たこと。経済的に困窮しながら個人として自立する道を選んだこと。芥川賞受賞時に選考委員へ辛辣な反駁文を送ったこと等等。彼女の生き方には、世俗と妥協したり流俗に屈服したりできない強烈な意思が感じられる。純粹かつ潔癖に人間性を追究する強烈な個性こそが、由起しげ子の作品を支える大きな力であり、当時の文壇小説には見られない作風を生み出したといえよう。

Ⅲ 「女中ッ子」にみる女中像

1. 由起しげ子と女中

すでに見てきたように、由起しげ子は経済的に恵まれた前半生を送ってきた。彼女が夫と別居するまで経済面では不自由ない暮らしをしていたことは、誰の眼から見ても明らかである。

彼女の出身階層や経歴を反映して、作品に描かれる家庭の大半は中流以上の裕福な家庭であり、そのほとんどに家事使用人、いわゆる〈女中〉が登場する。新婚時代から夫との別居を決意するまでの夫婦関係を描いた自伝的小説『やさしい良人』を例にあげよう。約20年の作中時間、すなわち、大正末から第二次世界大戦末期になるまで、主人公千鶴子の家庭では女中を雇っていた。夫犀二の海外研修についてフランスに住んでいた時には、マドレエヌという「通いの女中」がいた。帰国後、東京中野に借りた家では、「葉末はづえという名の手伝いといっしょに料理を作ったりして¹¹⁾」いた。次男が生まれてまもなく、夫が入院したのを機に、イセ子という15歳の少女を子守として雇った。新築した田園都市の家には「使用人部屋」が設けられ、葉末とイセ子も伴った。葉末が暇をとったさいには、葉末の親元の推薦により登記子という娘が入れ違いでやってきた。登記子は千鶴子びいきで、暇を取るとき、「私はそのうち結婚したらまたきっと東京に出てくるから、その時には泊まりがけで手伝いに来てあげます¹²⁾」などと親切な言葉を残している。彼女が去った後には、従妹の政江が女中として入った。このように複数の住み込みの女中がいるおかげで、千鶴子は子どもが4人もいるにもかかわらず、手にひびを切らすようなこともなくピアノを弾くことができたし、子どもを置いて外出することも可能だったのである^{注11}。

由起しげ子は、もっぱら女中を使う主婦の視点から、数多くの作品のなかで女中を描いている。ひるがえって「女中ッ子」は、女中として雇われる側を主人公とした唯一の作品である。

2. 小説「女中ッ子」に描かれた女中

「女中ッ子」は1954（昭和29）年、雑誌『小説新潮』12月号に発表された。この作品は、由起しげ子の短篇小説の中では珍しく、客観的な題材を扱っている。が、由起自身が長らく女中を使った生活をしてきたことを考え合わせると、あるいは由起自身の家に起こった事実取材しているのかもしれない。

「女中ッ子」は発表の翌1955（昭和30）年、田坂具隆脚本、左幸子の主演で映画化され、同年キネマ旬報ベストテン（日本映画の部）で7位にランクインするなど、好評をばくした^{注12}。「母よりも女中を慕う少年……学友から“女中ッ子”とアダ名される少年！しっかり結びついた女中と少年のまごころ¹³」という映画のキャッチコピーからもうかがえるように、映画では、母親から愛されない子どもと女中との心の交流に焦点があてられている。

いっぽう、原作である由起しげ子の小説は、単に心の交流を描くために書かれたものではない。中流家庭の歪みと大人のエゴを子どもを通して描こうとしたものでもある。そこには、当時の女中に対する人びとの意識（女中像）も如実に描かれている。以下では、小説「女中ッ子」のストーリーを女中像に焦点をあてて見ていく。なお、引用文の仮名遣いは雑誌『小説新潮』掲載時の「女中ッ子」にもとづいており、傍点はすべて引用者がつけたものであることを断っておく。

2.1 女中として雇われる

物語はある日曜の午後、山形から上京した主人公初が、東京郊外の加治木家を訪ねるシーンから始まる。「そっかしくて肝じんな時に肝じんな物を見えなくする癖」のある織本初は、昨秋、山形県から修学旅行で上京した際、お土産を買おうとしたら財布がないのに気づき、困っていたところをその場に居合わせた奥さんに助けられた。奥さんの名は加治木梅子。山形に帰ってから、借りたお金を礼状を添えて送ったが、返事はなかった。年始状に「中學を卒業したら女中になりたいのですがお宅に使用してもらへませんか」と書いて送ったところ、「お金はたしかに返してもらひました。東京へ来たなら遠慮なくおいでなさい、家でも手傳ひは要りますから」とのハガキが届いた。

中学を卒業した初は、奥さんからの返事を頼りに加治木家を訪ねた。あいにく梅子夫人は外出中で、お守りのように大切にしてきたハガキも見つからない。「校長先生のやうな顔をした」主人からは物売り間違えられ、「女中の話なんて知らん」と要領をえない。家庭教師兼アルバイトの若月よりからかい半分で「家出して来たのかい？」と質問されたので、初は「奥さんに手紙もらって女中に来たす」と答える。若月はさらに、女中になっても長続きしないだろうと言った。以下は、初と若月の会話である。

「なして長つづきしないだかね」

「それは知らんさ。バカバカしくて倦きぢゃふからだらう」

「おれ倦きことあねえ。働くこと好きだもん」

「働くのがそんなに好きなら女中よりもっといゝ稼ぎ口があるだろう」

「おれ、私女中がえゝです。柄だって先生も云ったけ」

「學校出来なかつたんだな」

「しかし女中も悪いやうばいぢゃないな、要領よくやればいろいろ余得があるからな。こ

の前もた奴なんか相当ため込んで行ったものな」

「そんなの女中じゃなくて泥棒ちゃねか。おれ泥棒じゃねえす」

「とにかくだな、奥さんは気まぐれだからどんな手紙を書いたか知らんが、キミは雇はれることはないだろうね。女中ではさんざんこりているからね。それに今は働く人もあるし……」

若月の言葉から、加治木家では以前にも住み込みの女中を置いていたことがうかがえる。「バカバカしくて倦きちゃふ」「女中よりもっといい稼ぎ口」などから想像すると、他の働き口を見つけて辞める女中や、不始末をしたために暇を出したりした女中がいたのかもしれない。よって梅子夫人は、「女中ではさんざんこりている」のであろう。

そのうち、親戚の娘で加治木家の家事手伝いをしているひろ子が帰って来た。「初を無視するばかりか追い立てるような態度を取る」ので、湯殿の焚き口の石の上に待避した。ぼんやり石にこしかけていると、ピシリと何かが彼女の脚に当たった。「痛え!」。小豆粒ほどの小石だ。

小石がまた飛んできたので、あたりを見回すと、白シャツの男の子が石はじきで彼女をねらっている。初が手招きすると、少年は石はじきをズボンのポケットにしまって出て来た。やせて青白い顔をした、神経質そうな少年。冷たく光る、残忍な感じの眼をしている。これが、加治木家の次男勝見との出会いだった。勝見は初に、家族に内緒で飼っている小犬を見せてくれた。

ようやく梅子夫人が帰ってきた。「来る前に一寸手紙でもくれればよかったのにね」「……」「まあいいわ。ウチでは今のところ手はあることはあるんだけど、どこか欲しいところもあるだらうし」。初は「物入れとも思はれる板敷の部屋」に寝床を与えられる。

初が加治木家に来てまもなく、ちょっとした事件が起こった。洗濯屋から帰ってきた梅子夫人のオーヴァが見えなくなったのだ。初が加治木家に着く少し前に洗濯屋がオーヴァを届けていたことから、初に盗みの疑いがかけられる。初と梅子夫人の間には次のようなやりとりがなされている。

「でもわたし、本當にオーヴァ見ません」

「あしたこれを警察に届けるとお巡りさんがしらべに来るけど、それでもいいわね」

「はい」

「悪いけど荷物しらべさせてもらっていい？」

「ああ、やんだぐなたはあ。(いやになったなあ) ンだが、すきなやうにしてけろ」

初の荷物の中からは怪しいものは何も出て来なかった。「ごめんなさいね、はじめから初ちゃんが盗る筈はないことは分かっていたのよ」と梅子夫人は謝った。

2.2 加治木家の人びと

加治木家は、夫婦と3人の子ども、雪夫(14歳)、勝美(9歳)、あきら(6歳)、それに親戚のひろ子をくわえた6人世帯である。一家を牛耳っているのは妻の梅子で、会社員の夫恭平の影は薄い。ひろ子は家事手伝いの傍ら、洋裁学校の夜間部に通っていたが、初が来たことで昼間部に変わることになった。ひろ子に専門的に洋裁を習わせ子どもの服を縫わせれば、家計が助かるという計算らしい。以下は、雇用契約を決める際の梅子夫人と初の間会話である。

「ひろ子にもあんまりまとまったものを持たせるとムダに使っちゃうだけだからそのつもりで私の方に預かってあるんだけど、初ちゃんもその方がいいでせう？」

「わたしお給金もらひたいですけど」

「だっていま別に金使ふことないじゃないの。お嫁の支度たいへんよ」

「お嫁に行かなくてもかまはんです」

「あら、お嫁にゆくよりお給金ちゃんちゃんもらふ方がいいの？」

「すまんですけど……」

「をかしな子ねえ。——近頃の人ってやっぱりさうなのかしら」

初がわずかなツテを頼って女中を志願したのは、実家が貧しく両親にお金を送りたいからである。しかし、女中になるのはもっぱら嫁入り支度のためと考える梅子には、初の心の奥底まで想像が及ばなかった。

ようやく女中として働き始めた初だが、梅子夫人は来客と外出に忙しく、用事を言い付ける以外に初とは口を聞かない。ひろ子は家中の誰よりもひどく初を見下げる態度をとった。「初との間にハッキリした段階を設けておく」ためである。家庭教師の若月は、度あるごとに「初が話す東北弁をからかった」。そして子どもたちは、大人たちの態度を見習い、「初の言葉と風態を珍しがったり気味悪がったりしてゐるが彼女が無力なのを知ると完全に彼女を馬鹿にすることを覚えてしまった」。雪夫は初に「八戒」（西遊記に出てくる豚の顔に人間の体をした化け物）というアダ名をつけ、子どもたちの間で初は「八戒」と呼ばれるようになる。

梅子夫人は、雇主と雇人の区別を明確に示すために、初には親しい態度は取らなかった。ひろ子も、家事を手伝うことを条件に暮らす居候的な存在である。女中である初との差別化をはかるためにも、初にはことさら厳しく当たった。三人の子どもたちは大人たちの態度をみて、初が加治木家で最下層の使用人であることを知り、見下げた態度をとった。

長男の雪夫は頭の回転が早い秀才型で病弱だったこともあり、幼い頃から大事にされて育った。長女のあきは末っ子ということもあり、一家の女王様だった。そして、次男の勝見といえば、「少しも愛らしさのない」子どもで、「学校では弁当ばかりではなく学用品なども時々失敬して問題を起こし、そのたびに呼び出しが来るので梅子夫人は恥ずかしくてPTAの役員を辞任してしまった」。そして、「何か気に入らないことがあるとメチャクチャに暴れ出して手当たり次第に物を投げつけ」るため、家族の間でも持て余されていたのである。

2.3 勝見の心を開く

そんな勝見が、女中の初とのかわりの中で次第に子どもらしい心を取り戻していく。紙幅の都合もあり、ここでは三つに限ってエピソードを紹介しておこう。

勝見には知られたくない秘密があった。オネショ（夜尿症）である。家族に見られぬようひとりで始末しようとしているところを初に見つかるが、初は「やったんだね、いいよいいよ。初の方が上手だから初がしてあげる」とアイロンを受け取り、勝見に恥ずかしい思いをさせぬよう「初もよくやったからね」と嘘までつく。そして、新しい寝間着やシャツに取り替えてやり、「またいつでもとりかへてあげるから心配しないで持っておいでね」と言葉をかける。

この日を境に勝見は初への警戒心を完全に解き、言われたとおりオネショで濡れた衣類やシー

ツを持って女中部屋を訪れるようになった。そして、初が始末をしてきている間に初の蒲団に入ってぐっすり眠り込んでしまった。初は家族に見つからぬように、明け方に勝見を部屋まで連れ戻すのが一苦勞だった。粗相をしても守ってくれる人がいるという安心感からであろうか。やがて、勝見の夜尿症はウソのように治ってしまう。

勝見と初との距離を縮めたエピソードの第二は、小犬をめぐるものである。先にも触れたとおり、勝見は家族には内緒でチビという名の小犬を飼っていた。ある日のこと、チビがつないでいた紐を食いちぎり、庭を散歩していたところを雪夫に見つかった。つないでいた紐が雪夫の寝間着の紐だったから、大騒ぎになってしまう。勝見は梅子夫人から、泣いてウルサイから捨てていらっしやいと命じられる。「いちめなきゃ泣かないよ。いちめるから泣くんだい」と勝見は抵抗するが、梅子夫人は許さない。そんなとき、手を差し伸べたのが初だった。「初が世話します、犬好きですから大丈夫です」とすかさず口を入れ、小犬を飼うことへの了解を取り付ける。チビという名の小犬は家族公認になり、台所の外につながるようになった。

第三のエピソードは、秋の運動会での出来事である。末っ子のあきは風邪で運動会を欠席。参加するのは勝見だけということもあって家族は誰も見に行かない。そこで初は一人で応援に出かけた。父兄が手拭いで眼かくしして、子どもに手を引かれて走る競争の時、初は勝見と組んで1着になかった。しかしその結果、勝見は級友の新吾たちから、眼かくしをゆるめて下から見ながら走れば誰だって一等になると言いがかりをつけられる。「こいつ女中っ子なんだよ」。勝見は新吾に飛びかかっていくが、逆にやられてしまう。喧嘩の話を聞いた梅子夫人は、仕返しなど絶対にしないよう



図1 小犬の世話をする勝見と初
(出所:「小説新潮」第8巻第16号, 281頁, 1954)

にと叱りつける。新吾は夫の会社の重役の子であるからだ。「僕悪くないよ」という勝見に対して、梅子夫人は「お前はママの子じゃない、鬼っ子ですよ」と言い放つ。

納得できない初は翌日、学校へ行き、新吾に手拭いを手渡し、しっかり初の眼を縛るように言い、一緒に駆けっこをするよう命じる。「ヨーイ、ドン」。新吾は勝負にならないのですぐに走るのを諦めてしまったが、眼かくしをしている初は気がつかない。コースを大きく外れて運動場の端に置かれた跳び箱に激突、気を失ってしまう。気がつくとき周りの人々から歓声と笑い声が起った。もちろん、新吾は自分の敗北を認めないわけにはいかなかった。

初は一介の女中にすぎない。だが、勝見にとって彼女は初めて心を許すことができた唯一の人であった。勝見の名誉のために、眼かくしのまま必死で走ってくれる初。それは勝見が初めて知った本当のやさしさであり、それまで誰も見せてくれなかった真実の愛でもあった^{注13}。いっぽう、加治木家の唯一のよそ者である初は、家族からうとんじられる勝見に同類の親近感を覚えたのではなからうか。

2.4 無実の罪をかぶって

旧正月が来て、母親が体調を崩して寝込んでいると聞いた初は、休暇をもらって山形に帰省し

た。ところが、初が留守のあいだに大変な事件が起きてしまう。飼い犬のチビが新吾の買ったばかりの靴を食べてしまったのだ。チビは梅子夫人の命により捨てられてしまう。その話を聞いた翌々日、勝見は学校へ行く支度をして家を出たまま帰らなかった。

勝見が初を見送りに上野駅まで行ったという目撃情報を得た家族は、勝見が初を追って山形に行ったに違いないと思った。梅子夫人は「なさけない子でねえ。女中のところへ家出するなんて——」と嘆きつつ、山形に向かった。この事件をきっかけに、梅子夫人の勝見への態度は大きく変わった。勝見のほうもよくしゃべるようになり、夜も遅くなるまで家族と一緒に起きているので、早朝に初を訪ねてくることもなくなった。初の方は、勝見の家出の件で、梅子夫人から「勝見を甘やかすすぎる」と叱られた。女中が「出すぎることはよくないから、よくよく気をつけてもらはなければ困る」ときつく言い渡された。

そして4月。春の大掃除のときに事件が起きる。女中部屋の片隅にある木箱の中から、昨年失くなった梅子夫人のオーヴァが見つかったのだ。それは昨秋、飼い犬となったチビのねぐらを移す時、物置小屋で発見したものだった。勝見がチビのねぐらの敷物として使っていたのである。しみや汚れは簡単に取れそうにはない。「事実をありのままに梅子夫人の前に告げれば彼女の罪は軽くて済むかもしれないが、それだけではどうしても出来ないような気がした。さうするには彼女は既に勝見といふ不遇の少年を愛しすぎてゐた」。途方に暮れた初は、その時オーヴァを女中部屋に持ち帰り、部屋の隅に積み上げられている木箱のいちばん底に隠した。

「これはどうしたの」と梅子夫人から問われた。汚れを落とすために、オーヴァを遠い洗濯屋へ持って行ったのが尚いけなかった。オーヴァは失くなった時と同じ状態が出て来たからである。勝見を傷つけないと考え、初はただ黙っていた。結局、オーヴァを盗んだ罪で、初は解雇を言い渡される。「よく働いてくれたら帰ってほしくはないけど、あゝいふことがあると子供の教育にも悪いから」。梅子夫人は、餞別として紙に包んだお金を初に渡した。初は黙って加治木家を去る決心をする。

初に求められていたのは、従順かつ忠実に働くことである。そこには初の意味は必要ない。梅子夫人の「出すぎることはよくないから」という言葉からもうかがえるように、勝見のためとはいえ、初の言動は女中の分限を超えていた。「あゝいふことがあると子供の教育に悪い」という言葉には、単に盗みをさすだけでなく、勝見を甘やかすすぎることも含まれるように思われる。だからこそ初は、それを良しとしない梅子夫人から暇を出されたのである。

いよいよ山形に帰る日、初は勝見に別れを告げたいと思って学校へ行った。先生が「勝見くんですか」と言って、廊下の方へ行って大声で勝見の名を呼んでくれた。勝見が出て来て「何だ、八戒か。用事かい？」と云った。「後ろから二三人の生徒がのぞきに来るので、勝見は小聲でおこったやうに云った。『學校に来るなよ。女中ッ子ってみんな僕のことを云ふから』」。そう言い捨てると、勝見は駆けて行ってしまった。

自ら勝見の罪をかぶってしまう初の行為は、センチメンタルな善意と見えるかもしれない。しかし、そうせずにはおられない初の人間性こそが、自分の殻に閉じこもった勝見の冷え切った心を溶かすことができたのであろう。しかし、善意も空しく、勝見の初に対する態度は冷たかった。「女中ッ子」の結末には、善意は必ずしも報われぬという由起しげ子の人生観が織り込まれている。

3. 1950年代の女中像

「女中ッ子」が発表された1954（昭和29）年は、戦後の混迷がようやく落ち着きを見せた時期に当たる。世の中が安定し、衣食住に少しゆとりができるようになると、都会では女中を求める声が高まった。一般家庭に冷蔵庫や洗濯機、炊飯器などの家電製品が普及するのは1960年代のことである¹⁴。1950年代半ばの家庭において、家事は手間のかかるものであった。1955（昭和30）年の国勢調査によれば、家庭女中は30万人にのぼり、紡績工、事務員、販売員とともに女子の四大職業のひとつに数えられている。加治木家のような中流家庭に住み込み女中がいるのは、珍しいことではなかった。

都会で働く女中の多くは、初と同じく地方出身の娘たちである。自由な時間は少なく、家庭の中で朝から晩まで働くばかり。「さびしい。ひとりぼっちだ」。1954（昭和29）年、そんな女中たちの親睦団体として誕生したのが「希交会」である。希交会は趣味と勉強を中心とした会で、女中の権利を声高に主張するような活動を行っていたわけではない。にもかかわらず、雇主のなかには、女中が会に参加することを嫌がる者が少なくなかった。たまの一日、女中がいないという不便さのせいではない。雇主の知らないところで女中に仲間ができ、勉強を通して見識を広めていくことが面白くなかったのである。女中は命じられるまま働いていけばよい。自分の意見を持って向上していく必要などない¹⁴。「女中ッ子」の梅子夫人に見られるような、女中を配下に置き、主従関係を求める意識は、現実においても根強かったのである。

希交会の機関誌には、差別的な女中像に対する女中たちの憤りがつつられている。「人から女中と見下げられて、初めてすべて職業には段階があった事を心から知らされました。女中とは人から侮辱されるような職業なんですか。私は女中です。ですが、立派な一人前の人間です¹⁵」。女中をひとつの職業として認め、見下げた態度を取らないでほしい。これが女中たちの訴えであり、最大の願いであった。裏返せば、女中を一段見下げたものとして扱うのが当時の一般的な女中像だったといえよう。

IV むすびにかえて

『小説新潮』に掲載された「女中ッ子」は1955（昭和30）年、新潮社より『女中ッ子・この道の果てに』という短篇集として刊行された。表紙カバーの裏には、次のような「作者のことば」が掲載されている。「今日私たちは云いようもない大きな不安や恐怖に取りかこまれて生きている。しかし私たちが日常心を労していることはやっぱりこまごました身邊の小さな波紋である。そんなことはどうでもいゝことだと云い切ってしまう人もあるかもしれないが、私はときどきそんなものも掌の上の上にのせてよく眺めてみたいと思う¹⁶」（傍点引用者）。

「女中ッ子」は、女中になるために上京した少女が、東京郊外の中流家庭に雇われ、自分の殻に閉じこもる勝見少年の心をつかむが、結局は少年の罪をかぶって解雇されてしまう。かいつまんで言えば、ただそれだけの話である。にもかかわらず由起は、初が加治木家にいる1年足らずに起こった出来事、すなわち由起が言うところの中流家庭の「細々した身邊の小さな波紋」をいきいきと描き出すことに成功した。隠していた小犬に対する勝見の愛情を中心にして、ストーリーが大きく転換し、発展して初の運命まで変わってしまうという構成は、実に巧みである。また、初の方言からユーモアを引き出すために会話を多く使っているが、それがこの作品を読みやすい

ものになっている。

女中のいる家庭に生まれ育ち、結婚後は女中を使う主婦として過ごした由起しげ子にとって、女中は卑近な存在であった。彼女は女中についてどのような考えを持っていたのであろうか。芥川賞を受賞する直前の1949（昭和24）年6月、由起は雑誌『文學界』に「脱走」という短篇小説を発表した。手の足りない家に知人の口利きで大連から復員してきた高商出の若い男を女中代わりに置いたところ、この若者が実は前科者で、家人の留守中に衣類や金を盗んで脱走した、という話である。作品の中で主人公の「私」は女中について次のように述べている。少し長くなるが、由起自身の女中観がうかがえる一節として引用しておきたい（傍点は引用者）。

私は女中といふものを好かなかった。何十年も女中の居る家で暮らし、女中を使って生活して来たが、たうたう女中を理解せず、女中も私を理解しなかった。私の家に来た彼女たちはどんなに年が若くても女中といふ人種に属し奥様といふ特権階級に使はれることを理想としてゐたやうだった。私が彼女達に職業人としての位置を自覚させ矜持と自由を持たせるやうに努めても彼女たちは猜疑と輕蔑以外にそれを受け入れやうとはしなかった。彼女達の頭の中には唯一通りの生き方、抜け目もなく監視され、上手に使ひこなされ、その間を彼女達はまた上手にごまかして油をうる、という個性のない卑しい機械的な生き方しかなやうであった。「二十歳の、あなたはお嬢さんなのよ。おかあさんがいらしたら花のように粧はせたいと思ふお嬢さんなのよ。だからいゝ趣味の身じまいをして頂戴。本を読むのだったら少しでもあなたの目をひらくやうな本を読むんですよ」。私はさう云ったし、女中部屋の扉をたゝかないであけたことはなかった。しかし私は女中ひ使い方をしらない人だと思はれ、頼りない奥様だと笑はれるだけだった¹⁷⁾。

主婦が、自ら考え、責任と自覚ある女中になってほしいと期待しても、女中は、ラクして仕事をこなすこと、ただハイハイとやり過ごすことにしか関心がない。そこには職業人としてのプライドはもちろんのこと、向上心のかけらも感じられない、と「私」は嘆いているのである。そして、由起しげ子の作品の多くに描かれるのは、こうした「個性のない卑しい機械的な生き方」をする女中像である。

ひるがえって「女中ッ子」においては、仕事にプライドを持ち、周囲に流されず自らの意思で行動する女中像が描かれている。由起しげ子から見れば、主人公初は、まさに理想的な女中と言えよう。

もっとも当時の日本では、由起のような考えをもつ雇主は少数派であった。当時は、女中をひとつの職業として認めるだけの社会意識が育っておらず、いっぽう、家庭の中で働く女中の立場は弱かった。だからこそ、自分の意思を持ち、妥協できない初は、黙って立ち去るしかなかった。「矜持と自由」を持った女中がうまく生きられるとは限らないことは、小説の結末からも明らかである。それが1950年代半ばの社会の真実であり、また、この作品を味わい深いものになっている。

【謝辞】

本稿を作成するにあたり、吉村稗先生（園田学園女子大学名誉教授）より多くのご教示をちょうだいしました。ここに記して、厚く御礼を申し上げます。

【注】

- 注1 2015年9月21日付オリコン週間“本”ランキングで、『火花』は週間5.4万部を売り上げ、累計売上を202万部に伸ばした、単行本の小説作品で売上200万部突端は、2008年4月の同ランキング開始以来、歴代初の快挙となった。
- 注2 芥川賞が社会的な注目を集める賞になった転換点は、一般に、石原慎太郎「太陽の季節」の内容に対する議論が沸騰した時からだと言われている。
- 注3 筆者の調査によれば、由起しげ子に関する作家論・作品論はきわめて少ない。文学全集や国文学雑誌の解説を除いては、吉村稔の論文が数えられるのみである。
- 注4 由起しげ子は音楽の方面での専門家にはなれなかったが、文学作品には、西欧の音楽史や音楽に関する知識が散りばめられている。
- 注5 由起しげ子の創作童話については、1950年に時事通信社から童話集『春を告げる花』として刊行されている。
- 注6 中村真一郎は、由起しげ子について「近代日本の普通の作家的な意識から遠い分だけ、普通の社会人の意識の方に近いという、特異な位置を、現代の文壇の中に占めている」と評している（「由起しげ子入門」『日本現代文学全集』91巻、講談社、1966年）。
- 注7 1950年代後半から60年代前半には、読売新聞に連載された「今日のいのち」（1956年）、バーのマダムを主人公にした「赤坂の姉妹」（1960年）、小説新潮賞を受賞した「沢夫人の貞節」（1961年）など、女性の生き方をテーマにした中篇・長編の小説を手がけるようになる。
- 注8 芸術家でありながら、金銭感覚に鋭く名譽欲も強い夫の人間性に対し、しだいに失望を深めていく妻。主婦という地位や役割に縛られることに耐えられなくなった妻は、安定した生活を捨てて自立する道を選ぶ、というストーリーである。
- 注9 吉村稔は、由起しげ子に「離婚」の事実がないことを戸籍謄本の写しにより確認している（吉村稔「作家」由起しげ子の誕生と出発」『園田学園女子大学論文集』第20号、1986）。
- 注10 坂口安吾は「由起しげ子よエゴイストになれ」というエッセイにおいて、由起の作品について「いろんな作中人物が、主人公、もしくは作中の事件との接触の面だけで捉えられ」「その捉え方、主観的、感性的で、自分を含めて客観された後に発現した感性とちがう」と述べている（『文學界』第4巻第3号、1950）。
- 注11 『指環の話』には由起しげ子自身と思われる「私」について、「女中を使って手にひびを斬らすこともない生活をする」と書かれている（『日本現代文学全集』91、講談社、344頁、1966）。
- 注12 1955年公開の『女中っ子』は日活作品。キャストは、左幸子（初）、伊庭輝夫（勝見）のほか、轟夕起子（梅子）、佐野周二（恭平）、田辺靖雄（雪夫）、高田敏江（ひろ子）、宍戸錠（若月）など。なお、この映画作品は1976年に森昌子主演でリメイクされた。女中という言葉は差別語だという配慮から、初につけられたどんぐりというアダ名から、『どんぐりっ子』という題になった。原作のテレビドラマ化としては、TBS『女中っ子』（1961年）、CX『女中っ子』（1963年）、NET『女中っ子』（1963年）、TBS『女中っ子』（1968年）、NHK『はっさんハイ！』（1973年）がある。
- 注13 吉村稔は初の人間像について、由起しげ子の継母体験が反映されていると指摘する。初は勝見にとっての「理想のママ母」として設定された人物だという（吉村稔「由起しげ子」山田有策編『女流文学の現在』学術図書出版、1985）。
- 注14 経済企画庁編『消費と貯蓄の動向』1967年および1977年

【引用文献】

- 1) 由起しげ子「接ぎ木の枝—文学自伝」『群像』14巻8号、1959
- 2) 由起しげ子「指輪の話」『日本現代文学全集』91巻、講談社、342頁、1966
- 3) 由起しげ子「接ぎ木の枝—文学自伝」『群像』14巻8号、1959

- 4) 同上
- 5) 同上
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 「芥川賞受賞のあとさき (座談会)」『文學界』第14巻第9号, 1960
- 9) 『芥川賞全集』第6巻, 小山書店, 157頁, 1949
- 10) 『芥川賞全集』第6巻, 小山書店, 291頁, 1949
- 11) 『やさしい良人』文藝春秋新社, 87頁, 1963
- 12) 『やさしい良人』文藝春秋新社, 252頁, 1963
- 13) 日活本社宣伝部『日活ウィークリー』No.27 (女中ッ子), 新世界出版社, 1955
- 14) 清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』161ページ, 2004
- 15) 「女中さんの会・希交会」, 『ニューエイジ』第7号第1巻, 1955
- 16) 「著者のことば」由起しげ子『女中ッ子・この道の果てに』新潮社, 1950
- 17) 由起しげ子「脱走」『厄介な女』時事通信社, 163頁, 1950

【参考文献】

- ・坂口安吾「由起しげ子よエゴイストになれ」『文學界』第4巻第4号, 1950
- ・由起しげ子「マルグリット・ロン夫人の思ひ出」『レコード芸術』第1巻第1号, 1952
- ・由起しげ子「女中ッ子」『小説新潮』第8巻16号, 1954
- ・由起しげ子『女中ッ子・この道の果てに』新潮社, 1955
- ・室生犀星『黄金の針：女流評傳』中央公論社, 1961
- ・平野謙「解説」『新日本文学全集』第37巻 (由起しげ子・大原富枝集), 集英社, 1964
- ・由起しげ子『女中ッ子』(ジュニア版日本文学名作選35), 偕成社, 1966
- ・中村真一郎「由起しげ子入門」『日本現代文学全集』91, 講談社, 1966
- ・吉村綱「由起しげ子文芸の形成したもの—女性の自立の意識とエゴイズムの確立—」, 「日本文学」第30巻第6号, 1981
- ・吉村綱「由起しげ子論—神戸女学院と芥川賞作家の世界」『神戸女学院百年史 各論』1981
- ・『芥川賞全集 第4巻』文藝春秋, 1982
- ・吉村綱「由起しげ子文芸における《母性》の特質—〈別居体験〉の系譜的作品を中心に」『園田学園女子大学論文集』第19号, 1984
- ・吉村綱「由起しげ子」山田有策編『女流文学の現在』学術図書出版, 1985
- ・赤木孝之「由起しげ子」『国文学 解釈と鑑賞』第50巻第10号, 1985
- ・吉村 綱「〈作家〉由起しげ子の誕生と出発」『園田学園女子大学論文集』第20号, 1986
- ・『伊原宇三郎展—一生誕百年を記念して—』目黒区美術館・徳島県立美術館, 1994
- ・中地文「【作家ガイド】由起しげ子」『女性作家シリーズ6 森茉莉／由起しげ子／荻原葉子』角川書店, 1998
- ・清水美知子「吉屋信子の小説にみる大正末～昭和戦前期の女中像—『三つの花』『良人の貞操』を中心に—」『関西国際大学研究紀要』第12号, 2013
- ・川口則弘『芥川賞物語』バジリコ出版, 2013
- ・鶴飼哲夫『芥川賞の謎を解く：全選評完全読破』文藝春秋, 2015